

Cruisin' 12月号 10月26日発行 隔月26日発行 第12巻第8号 平成13年9月14日第三種郵便物認可

アメリカ的クルマ文化を楽しむBi-Monthly Magazine・クルージン

12

December 2010
Vol. 069

Cruisin'



'32 FORD 時代を解く DEUCE REUNION

ホットロッドカスタムショー・ゲストレビュー
H.C.S.2010 COMING SOON!

S.C.T.A. BONNEVILLE SPEED WEEK

最速の座を目指して世界中の561台がアタックした一週間

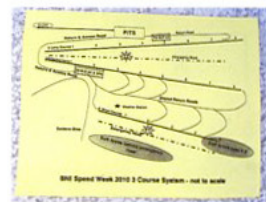
2010年8月14-20日 ユタ州ソルトレイク photo & report / Copyright : David Fetherston 翻訳:クルージン編集部

干上がった広大な湖、ソルトレイクの塩の上で世界一のスピードを競い合うボンネヴィル・スピードトライアル。8月のスピードウィーク、10月のワールドファイナルと、ここでは年間二回のレースが開催されている。たとえば自身が参加したクラスのNEWレコード＝世界記録を樹立したとしても、ダッシュボードに貼り付ける小さなメタルブラークと自己満足、プライドしか手に入らないこのレースに、381台のクルマと180台のモーターサイクルがやって来た。

ほぼゴーストタウンであるユタ州Wendover＝ウェンデヴァーの人々は、ここぞとばかりモーターの宿泊費をアップ。レースよりも町でのクルーズナイトを楽しむ人が増えてしまったがためのバカげた値段に、近年ではベテラン勢やオフィシャルたちはレースウェイのそばでキャンプを張り、静かに週末への闘志をウォームアップすることになっているようだ。

低予算で楽しむためのブライバーターから、本気の体制で臨むワークスチームまで、すべての人々が平等にホットロddingを楽しめる貴重な場所であるボンネヴィル。S.C.T.A.とB.N.I.は今年、新たに一本のショートトラックを塩の湖の上に追加。合計3本のトラックを使ってスムーズにタイムアタックが出来るように工夫した。その甲斐あって前年よりも一千本以上多い2,852本のタイムアタック・ランが繰り広げられたのである。

8月のボンネヴィルはご想像通り壮絶な暑さ。日中は気温の上昇とともに酸素濃度が薄くなり、人間にはもちろんタイムアタックにも不向きとなってしまう。タイムを狙うレーサーたちは夜明け前からスタートラインに並んで早朝のランに賭けるか、不調を克服して夕暮れ時のリベンジに燃える。ここに紹介するレーサーたちは本当にごく一部だが、今年も参加した台数だけのドラマがこの純白の広野を舞台に繰り広げられた。昨年のレポートでお届けしたレーサーたちの一年後の様子もピックアップしてきたので、合わせてお楽しみ頂きたい。



より多くのチャンスを、ということさらにコースが一本追加され、スムーズなタイムアタックが可能となり、記録樹立のチャンスも増した。



2009年はピストンヘッドに大穴をあけ、リペアしたあとは女性クルーのライセンス取得のためのテストランに終わっていた'27年ロードスター。というわけで、その彼女が実際にレーサーとしてエントリー。ヴィンテージ部門のXF/Blown Fuel Modified Roadsterクラスに臨んだが、エンジンが終了し記録更新ならず。



何台ものカスタムやホットロッド、レースカーをビルドし自らもレースに参戦し続けるミリオネア、ジョージ・ボティートのSpeed Demonは、新記録の樹立はならなかったが、今回のウィーク最速、418.486mphをマーク。エンジン不調やドライブシャフトのフランジ破損といったアクシデントも克服した。ジョージは日本でも販売されている健康食品会社の重役、かのRad Rides by Troyの大スポンサーでもある。





そのジョージが所有、かのRad Rides by Troyが走らせるプリマス・バラクーダ“Blowfish”もやってきたが、最初のランでシリンダーヘッドに穴をあけ必死の作業で修復。結果的に249.945mphを叩き出した。モーターはMoparのスプリントレース用V8モーターをターボ化したもので、レースカーにも関わらず細部の作り込みや美しさはトロイならでは。



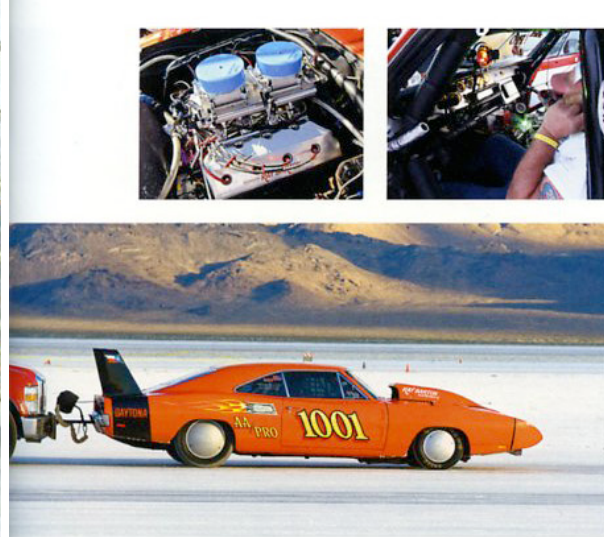
ベテランビルダー、Automotive Machine Serviceによりハイパフォーマンス化されたストレート8気筒の320cu.inモーターで臨むヘアメタルの'52年型ビュイック・スーパー・リビエラ。ボディはチョップ、ストレッチ、ウエッジされたレース専用のもの。2009年に133mphを記録していたが、今回は8番シリンダーを破損しレースを終えた。



無理やり押し込められるように収まるコックピットからの視界は、わずかこれだけ。究極に狭い暗黒のスペースで体験する300マイルオーバーの世界は想像を絶するものだろう。



Speed Nymph=スピードの妖精と名付けられたストリームライナーはカリフォルニア州San JoseのベテランレーサーDennis Varniが新たに仕上げて初挑戦するもの。バックスピークやデザートレース向けのGM製ストレート6モーターをツインターボ化したもので、317.739mphをマークした。二基のタービンによる排気音の吸収が効いているのか、このレーサーは音がほとんど聞こえなかったのが印象的であった。



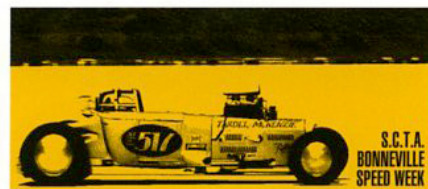
ダッジ・チャージャーDaytonaで長くチャレンジを続けているLee Sicilioは、同じDaytonaでNEWマシンを仕上げており、このレーサーは今回が最後のレース。インジェクション化したHEMIパワーで238.160mphを叩き出し、このクルマの有終の美を飾った。



ネヴァダ州で毎年開催されている“バーニングマン・フェスティバル”にオブジェを製作している有名なアーティストDavid Best氏が、長年の夢を叶え初めてレースに参加。そのマシンがこのホンダZ600だ。ストックのモーターにターボを装着して50馬力を発揮し、ストックのトランスミッションと組み合わせて85.060mphを記録。'70年代前半に世界中に販売されたこの小さな空冷二気筒エンジンの大衆車が、見事に世界記録を樹立したのである。



「全米中でもっとも孤独なトイレ」と思わず呼びたくなってしまふ!



S.C.T.A.
BONNEVILLE
SPEED WEEK



カナダからやってきたこのストリームライナー“Goldenhawk”は、4気筒のディーゼルエンジンを搭載。ドライバーを冷やすため、待機している間はボディにエアコンを載せるという気合いがいりだったが、レースの過酷さに耐えられず記録をマークすることはできなかった。



2003年モデルのエンツォ・フェラーリを持ち込んだのはRichard Loose. 12気筒+ツインターボで1000馬力を叩き出すスベックだったが、179mphをマークしたファーストランではパラシュートが開かず、188mphに達したセカンドランではスピンを喫するなど、速いクルマが記録をマークできるとは限らないことを証明する羽目になった。



フランスのE-bayから購入した1985年のMotoobecaneというメーカーの50ccモーターを搭載するバイクも持ち込まれた。モベッドレース界では有名なThierry Girardというフランス人ビルダーにより12馬力を発生するもので、無段変速のオートクラッチ式。カリフォルニアのCampos Brothers製作によるフレームで77.611mphを出したが、向かい風では大幅にダウンし85mphのクラスレコードには届かなかった。このクラスなら日本人ビルダーにもチャンスがありそうだ。



新車などのスクープやリポートで有名なマガジンRoad&Track誌のプロジェクトカーとして製作されコースに乗り込んできたのは、なんとスズキのミドルサイズセダン、「Kizashi」だった。ターボ+N20(ナイトロ)併用というセッティングの難しい仕様で203.720mphという記録を叩き出す快挙を達成。ほとんどストックLOOKのセダンで300km/hオーバーとは恐るべしだ。



C5モデルのコルベツを駆り、ここソルトレイク以外にも東部やテキサスのスピードトライアルでも好成績をマークしているDavid Pilgrim。今回はひとりでハーレーも走らせるダブルエントリー。リアタイヤの後ろにタービンをセット、助手席は水冷式インタークーラーでギッシリというツインターボのLS2モーターは1200馬力を発生。BGTクラスで246.148mphというば400km/h目前をマークしたが、トランスミッションの破損でバックアップランが出来ず記録は未だに。ハーレーでは目立った記録を残すことはできなかった。



はるばるフランスからユニークなレーサーばかりを持ち込んだチーム。目玉だったのはエアコンプレッサーのようなモーターで走るストリームライナー。二基のモーターが並列されチェーン駆動で後輪を回すようだが、オフィシャルの車検をパスするのに手間取り走行が遅れた。そのうえなんとチェーンが飛んでモーター基を破損、生きているモーター基で62mph出ることを確認できたのみに終わる。ほかにイギリスのReliant＝リアイアント社のワゴンにバイクの四気筒モーターを縦置きに積んだレーサー、女性レーサーが駆る1935年Monet Goyonという2サイクルスクーターベースのレーサーなど、欲張りすぎたせいか、どれもまともな記録はマークできなかったようだ。



昨年のリポートにも登場していた'53年Studebakerは、もちろん自身の記録を破るために臨んでいるのだが、高速走行時のダウンフォースが効き過ぎたのか、ノーズから床下をカバーするアンダーパネルが路面つまり塩を削ってエンジンルームにかき上げるといトラブルに遭遇。プロワの不振をきたしレース続行は断念せざるを得なかった。これもまたボンネヴィルによくある、ひとつのストーリーである。それにしてもクルーたちの高給ぶりといったら!



昨年のリポートでもお届けした、カウルフード以外はストックをキープしたままの'49年Studebakerピックアップ。二基のモーターを使い分け、ふたつのクラスの記録をキープし続けるのも変わらずだ。AA/MPクラス向けのBBC565cu.inモーターは今年も好調で、タイミング変更やジェッティングにより219.331mphをマークした。この大昔のピックアップが350km/hというスピードで疾走するという想像を超えたシーンがここでは当たり前になり始めるのだ。



レースウィークの間、あちこちで見かけたキュートなオールアルミボディのサンドバギー兼サービスカー。VWやバギー界で有名なManx Chassis社が持ち込んだもので、同社はこれをキット販売していたらしく、さかんにアピールして走り回っていた。



このトライクは、かのハイパフォーマンスメーカーS&Sの3リッター近いビッグモーターを積みSC/PFクラスで178.639mphを樹立。なおS&Sは二輪のビューエルに160cu.in＝約2.62リッターのレースモーターを積み180mphを突破している。



レースウィーク中、561台がここから記録に挑んだスタートライン。数々のドラマはここから――See you next year!!